

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

「ブナの森」緑のブロッコリー：鍋倉山スキー山行抄(杉山昭久氏筆)

信高山岳会の5月例会の報告を杉山さんの文で紹介したい。・・・かつて、伊澤（元信高会長）さん、大西（現大町高）さん、杉山（現飯田高校）3名で、戸狩スキー場・トン平から鍋倉山までスキー縦走を実施した。今回もこのコースでと計画したが、スキー場のリフト営業の終了で頓挫。除雪終了地点、田茂木池上部のチェーン装着場・巨木の森入口まで行き、そこから鍋倉をめざすことにした。

今回の参加者は、沼田、横内、松田、大西そして杉山の女性2名、男性4名の5名。7時30分巨木の森入口にはすでに5、6台の県内外の車が止まり登山の準備にかかっている。温井集落にはいまだ所々残雪が見られたが、ここ標高800m地点にはまだたっぷり雪が残り雪の壁を作っている。それにも増して、まだ早いと思われたブナの若葉の淡い緑と、残雪の白さとのコントラストが実に美しく見事としか言いようがない。白い雲（雪）の中から、巨大なブロッコリー（ブナの若葉）が顔を出している。天気も最高だ。



身支度を整え、出発。関田峠・茶屋池から黒川山を経て鍋倉山への稜線鞍部から流れ下る出川上部（源流域）を詰める。沢は雪に埋まり全く姿なし。出川は自分が飯山で生活した8年間、勤務校（飯山南）での同僚2人で、機会あればイワナ釣りに興じた沢である。鍋倉山はブナの原生林に営まれ、それは見事な森を形成している。山全体が天然の貯水槽のようなものだと思う。

昔人はここ、鍋倉山に足を踏み入れ、ブナの巨木に‘水’という字を刻んで導んだ。何か所かに刻まれた巨木が残されている。巨木の森には、樹齢300年を超えていると言われる通称‘森太郎’‘森姫’‘いまは老朽ちて倒れてしまった’‘こぶブナ’と名づけられた巨木をはじめ、他にも多くの巨木が存在感を示している。しかし、老朽化が激しく、現在は、鍋倉森の家の職員らが、遊歩道を整備しつつ、巨木の保護に当たっている。また、ここ鍋倉山は‘天然なめこ’の宝庫でもあったが、今はその昔では無くなってしまった。良き時代に飯山で遊ばせていただき、幸福の時代を過ごさせて頂いた。

こんなブナ林の中を快適にスキーを進め登る。なんと表現したら良いか困るぐらい素晴らしい。自らの根本に、春を告げるかのような雪解けの輪を広げるブナ。上を見上げれば、青い空。灰色の幹に生える新緑の芽ぶき。どこをとっても絶景である。この季節のブナの森は最高だ。こころを癒してくれる森だ。

2時間ほどで鞍部に出る。そこから10分ほど登り詰め、鍋倉山山頂。10:00。眼下に残雪に生える緑のブロッコリーの数々。東に目を転じれば千曲川を挟んで野沢温泉の毛無山。その背後に苗場山をはじめ、岩菅山、横手、笠岳等の志賀高原の山々。千曲川の向こうに高社山。飯山市、木島平村。北



には茶屋池から続く関田山脈。西にはどっしりと残雪の妙高山、火打がそびえる。遠く日本海をも望める。360°の大展望を楽しむ。

山頂は15、6名の登山者が、かわるがわるその眺望を楽しんでいる。我々より少し前に到着した4人の男性グループは、雪のテーブル上で、バーベキューを大いに楽しんでいる。本当に楽しそう。我々も、負けじと雪のテーブルの作成にかかる。持参のスコップを使い雪を掘るが、意外と締まっていて難儀する。畳一畳ほどのテーブル（深さ30センチ）が完成。さー楽しい昼食です。がしかし、まだ10:30。絶景の中での早昼食。大さん奥様の愛情のこもった、いつものパウンドケーキ登場。それにしても、奥様、大さん山へでかけるたび、ケーキ作りをするなんて、実にうらやましい話です。今日はラブレター入っていませんでしたが。

1時間余りを山頂で過ごし、絶景を惜しみつつ、下山を開始する。登って来たコースでなく巨木の森にある森太郎に会おうと、山頂から出川右に下る稜線を快適にくぐる。100mほど下ったところから、スキーにブレーキがかかったように全く滑らない。どうしたのか。下山してわかったことだが、ブナの新芽から落ちる油が雪面に落ち、滑走面にクロスカンリースキーの滑り止めのワックスを、全面に塗ったような状態になったのが、原因だった。尾根上から森太郎を探す、それらしき巨木はあるものの、ここからははっきりしない。森太郎がある沢へ下れば、また登り返さなくてはならない。そんなわけで、森太郎に会うのをあきらめ、出発地点側の通称、‘大斜面’を滑り降りることにする。

5分ほど登り返し、大斜面上部に出る。切り開かれた雪の大斜面が眼下に広がり、約400m下に車が並んでいるのが見える。ここから見る緑と白のコントラストも素晴らしい。結構な斜度のある斜面は、スキー場でいえば、上級コース。止めワックスがかかってもこの斜面ならば問題ない。我々5名は、スキーの技術はそれなりの腕前？その腕前を發揮しつつ、快適に小パラで滑り降りる。沼田、横内の女性2名のスキーの腕前も見事。あっという間に出発地点近くに着。上を見上げれば我々が滑り降り



たシュプールをはっきりと見る事ができた。12:30

県外らしき観光客が、大型バスでこの地まで足を運び、この若葉のブナの森と白き残雪の見事なコントラストをしきりカメラにおさめていた。

田茂木池は、雪解けした雪の塊が、流氷のようにまだら文様の島になり、青白い幻想的な様相を見せていた。

横内さんとはここで別れ、4人は戸狩温泉、暁の湯につ



かり、本日の疲れを癒しました。本当に心に残るブナの森・鍋倉山でした。

「難に遭って」思ったこと

私事だが、先日不本意ながら遭難した。文字通り「難に遭った」のである。

天気誘われて、連休最終日の6日、針ノ木雪渓にスキーで登っていた時の事だ。途中から蓮華岳を直登しようと、蓮華岳から流れ出る大沢に入った。大沢は針ノ木雪渓の大きな支流の一つだが、地図で確認すればすぐわかる。僕の上部に一人先行者がいたが、

程なく追いついた。

僕の方を見て、「ここから針ノ木へは行かれますか？」という。そこで、地図で今いる場所を示し、針ノ木に行くには一本沢で、このまま行けば蓮華岳へ登り上げることになることを教えた。ただし、登り上げた後稜線を針ノ木峠へと辿れば針ノ木へ行くことは可能なことと同時にこの沢は上部がやや急になるので、注意が必要だと伝えた。関東のとある県から来たというその女性はいくらか山慣れをしているようではあったが、この山域に入るのは初めてで、家族に「一人で行くのは危ない」と止められたものの、「きっと誰かいるから大丈夫」と言って家を出てきたのだという。出で立ちはそのなりに、歩き振りもまあまあではあったが、こういった他人に依存する姿勢の登山者は最も危険なタイプの一つである。そしてこういう輩が、無事登山を終えると「私でもあんなところに行って来られた」と危険も武勇伝になってしまうので、要注意なのだ。

「登り始めて一人ぼっちで不安だったけれど、おじさんがいてくれて助かった」などとのたまわれ、内心ムツとしたが、旅は道連れよろしく着かず離れずの同行となった。しばらくすると斜面はかなり急になり、両サイドの尾根も狭く迫り、ちょっとしたルンゼとなった。その上の小プラトーを目指し、僕はスキーのシールの具合を確かめ、スキーアイゼンを装着していたので、やや時間を食い彼女が先行していた。

「アッ」という声で上を向くと、彼女がスリップして落ちてきた。逃げ場はなく、巻き込まれた僕は、一緒に滑り出した。程なく彼女は持っていたピッケルで止まったものの、滑りだした僕は50mほど流された。(後でGPSで確認すると時速15kmほどのスピードで落ちていた) 下部の緩やかなところで止まるだろうという思いはあったが、かなりスリリングな数秒間であった。「大丈夫か」と声をかけると「大丈夫です」と声が帰ってきた。ふっと気づくと、右足ふくらはぎ上部が7cmほどぱっくりと切れ、中から肉が見えていた。右手も擦過傷で出血している。彼女にまた落ちられてもなす術がないので、「とりあえず危険だから上へ抜けろ」と指示して、「僕は怪我をしたからここから降りる」と告げ、慌てるなど自分に言い聞かせた。水で洗った後、持っていた医療用のステリストリップ(医療用の創傷閉鎖用テープ)で傷口が開かないようにし、三角巾を巻いて止血をした。

標高は2400m。ここから扇沢まで標高差約1000mを下りねばならない。ええいままよと、深呼吸をして、スキーを履き下ってみる。幸い右足は耐えてくれそうで、大きなターンを繰り返していけば下れそうだ。結局、安全地帯へ出た彼女はそのまま登って行ってしまった。何とか扇沢まで下り、駐車場から妻に電話をし、緊急医が松本市内のA病院であることを聞いてそのまま直行した。

医者「スキーで下り、自分で車を運転してきた」と告げると目を丸くされるほどびっくりされたが、傷が筋肉まで達していないのと、処置がよかったと言われた。結局僕の足は、内部を10数針、外側を13針と合計30針ほど縫うという怪我であった。山で死んではいけない。しかし、腹立たしい一方でこのようなもらい事故から学ばせてもらったものも多い。ここに入山すべきでない未熟な登山者に迷惑をかけられたということとはともかく、現実にはこんな登山者もいるのだ。僕自身も狭いルンゼに前後して入り込んだことも反省としては残る。だが、どんなときにも冷静に行動すること、ザックの中にピンチ対応の品を持っていたことも大きかった。このようなことは、山登りとして恥ではあるが、しかし、敢えて書くことで自らにも肝に銘じたいと思ったことだ。